

# 視覚で判断できる笑顔の種類と個人特性との関係性

宮 詩織

(上松 幸一ゼミ)

## 問 題

### 1) 笑顔の多様性について

我々は日常生活を過ごす時、様々な場面で多くの感情が芽生え、その感情が表情に現れる。表情は相手の感情を押し量る上で重要な役割をはたしており、言葉で伝えることなく相手の感情を理解できる一つの手段である。特に、笑顔は日常生活でよく見られ、かつ相手の感情を読み取ることのできる重要な表情の一つと言える。

モンデリーズジャパン (2017) の調査によると、笑顔は1日におよそ11.3回表出されると示唆している。またこの調査では、1日5回以上笑う人は、笑わない人よりも見た目年齢が実年齢より若く見える確率が2倍以上高いことが示唆されている。他にも、菅原ら (2007) は、笑顔を見せる人は見せない人よりも、経営、販売、教育の面で肯定的な評価を得ていることが示唆している。また、大藪・吉川 (2007) では、笑顔は真顔に比べ、より魅力的、誠実、社交的、有能に見える」と述べている。さらに笑顔は、対面型コミュニケーションで、人と人の心をつ結びつける大きな役割を果たしており、笑顔は対人関係を円滑に進め、日常生活で最も頻繁に見られる幸福の象徴と述べられている。

また近年では、笑顔の重要性の認知度も高まり、笑顔づくりを指導するコンサルタントビジネスが人気を集めている (菅原ら、2007)。笑顔は視覚に訴える性質を持ち、表情筋運動の技術としての側面があるため、感性商品としての可能性を秘めている。接客業を中心とした魅せる笑顔、精神の健康をサポートする優しい笑顔、子供を惹きつけるキャラクターの笑顔など、笑顔の印象をデザインしていくことで、人と人、人ともとの関係性を一層深めることが期待できるといえよう。人は笑顔により、人間関係を良好に保つことができるのである。

しかし、笑顔は時に人を不快にさせる要因になることもある。謝罪場面や葬儀の場合など、笑顔を見せてはいけない場面 (謝罪場面やお葬式) で笑顔を見せてしまうと、他者を不快にさせる原因にもなりうる。伊藤 (2011) によると、笑いは、協調性と攻撃性という二面性をもっていると示唆されている。伊藤ののでは、5割以上の者が他者から不快な笑いを示された経験をしており、日常生活の中で誰にでも起こりうる不快なエピソードから、いじめに発展するような内容の経験をしていることが示唆されている。しかし一方で、笑顔を通して不快な経験をしているにもかかわらず、「笑顔そのものに不快を感じている人は1%未満である」ことも示唆されている。このことから、コミュニケーションの場において、一定の配慮が可能であれば、笑顔が人を不快にさせることはないと言えるかもしれない。

広辞苑には、「笑顔とは、嬉しそうに笑っている顔」と記述されている。しかし、笑顔は「微笑み」や「微笑」、「愛想笑い」、「高笑い」、「大笑い」、「苦笑い」、「失笑」、「照れ笑い」、「はにかみ」などの様々な表現で示されているように、一つ一つ違いがある。佐藤ら (2012) によると、笑顔の特徴として挙げられた項目は、「歯が見える」、「口を開ける」、「口角があがる」、「目尻が下がる」、「目尻のしわ」、「目の形の変化」などがあるが、この研究では目の変化よりも、口の変化が笑顔の中心の特徴として挙げられている。

また菅原らによると、抽象化した顔文字においても、笑顔は「(^o^)」,「p (^\_^) q」,「(^1^)」,「(^人^)」,「(#^.#)」のような、感情によって使い分けられることができるよう、複数のパターンで表現されている。絵文字でも目の形は同じだが、口の形を変えることによって様々な感情の笑顔を表現している。このことから、口の動きは笑顔の裏側にある意味を押し量るうえでも重要な要素と言えるだろう。

## 視覚で判断できる笑顔の種類と個人特性との関係性

益子・斎藤（2006）は、静止画よりも動画の方が人物の状況、印象や感情を推測しやすくなると示している。「笑顔」と捉えられる表情であっても、微妙な表情の動きと連続性が、感情判断などの分析をする手がかりとなっていると述べている。

### 2) 笑顔の読み取りについて

しかしながら、我々が実際に他者の笑顔を見た時、その笑顔がどのような感情から表現されているものなのか、適切に判断できているだろうか。我々が笑顔を作る時、その時に持った感情を状況に応じて無意識に使い分け、たくさんある笑顔の種類から1つを選択している。だが、笑顔から読み取れる感情を、他者が明確に理解しているとは限らない。むしろ、笑顔の識別は思いの外難しいのではないだろうか。自閉症を抱える人たちは表情を読み取ることに對する困難さを抱えていると言われている。佐々木（2010）によると、自閉症スペクトラムの子どもや人は、暗黙の了解が成立しにくい。身振りや表情などの非言語性コミュニケーションの意味をくみ取ることもさまざまに困難である。また、学校の試験などでは高得点をあげ続けている高機能の子どもであっても、言葉の理解は字義どおりであり、比喩や冗談は通じにくいことを示唆している。また、北山（2008）によると、自閉症の表情認知では全体的な相対的配置よりも、顔のそれぞれのパーツにより依存しあった認知の方法を取っていると述べている。実際に北山の研究では、表情の主要なパーツ（目・鼻・口）に関して、統制群では目を中心に視線を移動しているのに対して、自閉症群は平均した視線移動をしており、自閉症者は顔または表情を1つの物体として捉えていることを示唆している。自閉症児は、既に幼児期から他者の視線を回避したり、他者とのかかわりを拒否するという特徴を示している。コミュニケーション場面において、相手の表情を見て感情を読み取るということはとても重要であり、一定の能力が必要であることを示唆する研究と言える。

以上のことから、適切な笑顔の理解には一定の能力が必要であり、かつその能力がうまく機能することにより、他者との肯定的で適切なコミュニケーションが可能となる。逆にいうと笑顔の理

解が上手く機能しなければ、他者とのコミュニケーションが上手く機能しづらいということになる。それは結果的に、その者の対人関係の持ち方や、個人の性格にも大きな影響を与える可能性があるとも言えるのではないだろうか。

### 目 的

そこで、本研究では、様々な感情での笑顔画像の印象を他者によって評価させ、評価結果と実際の感情がどの程度一致しているのかを把握する。またそれとともに、笑顔の評価力と個人の特性との間の関係性を検討することを目的とする。

### 方 法

参加者：17歳から42歳までの80名（男性26名、女性52名、その他2名）が実験に参加した。参加者に関しては、福祉心理学、及び障害児・障害者心理学の授業を受けた学生に対し、先端なび上で依頼を行った。

回答方法：コロナウイルス感染状況を鑑み、対面での実施は避け、WEB上で実験を行うことにした。本研究ではGoogleforms (<https://www.google.com/intl/ja/forms/about/>) を活用し、被験者に回答を求めた。その際、被験者各自の利用するデバイスにより提示される顔写真の画像のサイズが変化し、そのことが評定に影響を与える可能性が考えられたため、画像の表示サイズに大きなばらつきが出ないように、回答に使用するデバイスをスマートフォン（6インチ程度）に限定して行ってもらったこととした。

写真の選定：今回の実験では、“大笑い”、“愛想笑い”、“微笑み”、“苦笑い”の4パターンの写真を男女で各1枚ずつ、合計8枚の写真を用意した（注）。男性1名、女性1名に協力してもらい、合計100枚の写真を撮影した。撮影した写真の中から、利用する写真を3名の心理学科の学生、および教員による合議制で決定した。

尺度の選定：本研究では、岡本・生和（1991）による対人不安尺度、立山（2006）による凝集性尺度、毛・大坊（2006）による社交性尺度、菅原（1984）による自意識尺度を用いた。

倫理的配慮：実験を行う前、実験対象者に①実験結果は本研究にのみ活用されること、②実験対象者の匿名性が担保されること、③本研究の目的は、卒業論文の作成であること、についての説明文を記し、最終的な同意が得られた者のみ回答してもらうこととした。

## 結果

被験者に笑顔写真を評定してもらったところ、Figure1のような結果になった。そこで、0点から5点のものを笑顔評価「低・中得点群」、6点から8点のものを笑顔評価「高得点群」として群分けを行い、各群における4尺度の平均値を算出した（Figure2）。この2群の比較を行うため、2（笑顔得点：低中得点群・高得点群）×4（性格特性：社交性・相互不安・凝集性・自己意識）の2要因分散分析を行った。笑顔得点は被験者間要因、性格特性は被験者内要因であった。

その結果、笑顔得点の主効果には、有意な差はなかった。また、性格特性の主効果に関しては、 $F=39.63$  となり、1%水準で有意な差が認められた。さらに、性格特性と笑顔得点の交互作用については  $F=2.63$  で有意な傾向があったため、多重比較を行ったところ、笑顔評価の高得点群と低中得点群との間において、凝集性得点に有意な差があり ( $F=8.83, p < .01$ )、笑顔低中得点群の方が、高得点群よりも有意に得点が高かった。

その他、女性4枚と男性4枚の写真から、それぞれ好きな顔と嫌いな顔を選別してもらった。その結果、男女共に微笑みと大笑いの顔が好まれ、愛想笑いと苦笑いの顔が好まれなかった (Table1)。

## 考察

### 1) 全体的考察

本研究では、外向的であるほど、つまり、人と接することが多いほど、笑顔の真实性判断の基準が厳しいという藤原 (2015) の結果をもとに、①対人場面で不安を感じる人は、笑顔と感情を一致させることが難しい。また、対人関係で不安を感じない人は、笑顔と感情を一致させる能力が高い。②家族関係が友好でない人は、笑顔と感情を

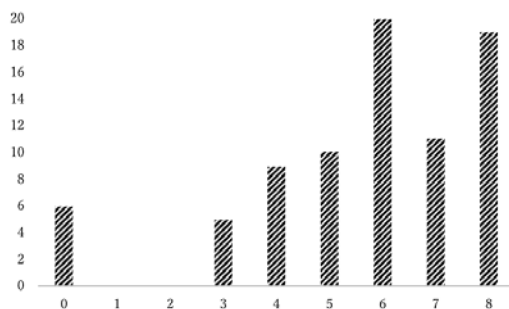


Figure1 笑顔評価得点別人数

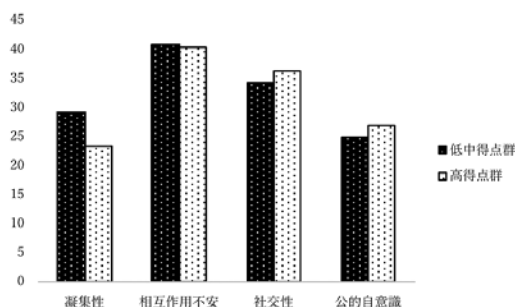


Figure2 低中得点群と高得点群の尺度比較

Table1 男女間における好きな顔と嫌いな顔の差

性別	愛想笑い	苦笑い	大笑い	微笑み
女性				
好き	3	1	56	20
嫌い	24	53	2	1
男性				
好き	1	0	57	22
嫌い	12	68	0	0

一致させることが難しい。また、家族関係が友好であればあるほど、笑顔と感情を一致させることができる。③社交性が高い人は、笑顔と感情を一致させる能力が高く、社交性が低い人は、笑顔と感情を一致させることが難しい。④自意識が低い人は、笑顔と感情を一致させる能力が低く、自意識が高い人は、笑顔と感情を一致させる能力が高いという、4つの仮説を検証するために、実験を行った。しかし、本研究の結果は、どの仮説とも異なる結果となった。むしろ本研究では、家族との凝集性が低い者ほど、笑顔評価得点が高くなり、より笑顔を適切に評価しているという結果となった。これは、②家族関係が友好でない人は、笑顔

## 視覚で判断できる笑顔の種類と個人特性との関係性

と感情を一致させることが難しい。また、家族関係が友好であればあるほど、笑顔と感情を一致させることができる、という仮説とは相反する結果と言える。

本実験で有意な差が認められたのは、笑顔を見分ける能力が高いと家族の凝集性が低いということのみであった。凝集性が低いということは、家族との関係性があまりよくないという側面を持つ。家族と会話をしない、相談をしない、親しみを感じない、助け合わないなど、凝集性が低い家族は、家族として機能していない家族ということになる。しかしながら、笑顔を見分ける能力が高い人の方が、なぜ家族としての凝集性が弱くなってしまっているのだろうか。

家族とは、子どもが初めて経験する最小単位の社会である。たとえ家庭の環境が良くなかったとしても、子どもはその集団に所属することを強制され、変更はできない。子どもは生活する中で、環境を変えるのではなく、環境に適応しようと努力をする。しかしながら、どのような家庭環境であっても、子どもは“親に話を聞いてもらいたい”、“相手をしてもらいたい”という欲求から、親と関係を築こうとする。しかし、家族関係が悪く、凝集性の弱い家庭では、親が不機嫌であったり、親に相手にされなかったり、また理不尽に怒られるようなことが多いと推測される。しかし子どもは親に理不尽に叱責されたとしても、構ってもらいたいという欲求から、何度も親に関わろうとする。そのような状況を子どもは数多く経験し、その結果、親の機嫌の良い時を狙って話を聞いてもらおうとすることを学習する。つまり、親の顔を伺って行動するようになる。これは、両親の不仲が顕著な場合も同様であろう。子どもは相手の顔を伺うという行動を学習してしまう事になる。その結果、相手の顔を伺う行為が汎化し、社会でも同様の行為が表出されてしまうと考えられる。凝集性が低い人、つまり家族との肯定的な関係を持てなかった人は、家族との肯定的な関係を持ち、凝集性が高い人よりも、表情を読み取ることに強い意識を向けて、そしてそのことに慣れている可能性が高いことがあったと考えられた。そのような者にとって、人の顔を伺うということは、自分の身を守る処世術になっているとも言えよう。凝

集性の低い家庭で育ってきた者にとって、親に構ってもらいたいという欲求を解消するには、顔を伺うというスキルは必要なかもしれない。

笑顔を見分ける力が高い人は、そうでない人と比べると、他者の笑顔が必ずしも肯定的感情を伴うわけでないということをが理解しやすいと考えられる。そのような偽りの笑顔を見る回数が増えることにより、人間関係を消極的にしてしまったり奥手になったり、家族とのコミュニケーション行動を億劫にしてしまったりするのかもしれない。凝集性が低い家族になる理由として、感情を読み過ぎることが、家族の凝集性を低下させてしまうという可能性も考えられる。

なお、補足的な調査として、顔写真の好き嫌いを評価してもらったところ、男性も女性も好まれる表情は大笑いと微笑み、好まれない表情は愛想笑いと言った結果であった。この結果は、笑顔評価得点が低中得点群も高得点群も大きな差は見られなかった。しかし、この点は非常に重要な側面かもしれない。「大笑い」や「微笑み」はその表情の中に「肯定的感情」が含まれている。逆に「愛想笑い」や「苦笑い」には否定的感情が含まれていると考えられる。被験者である大学生は、この表情の中に含まれる肯定的感情と否定的感情を大まかに推し量り、判断しているということになる。その点では、笑顔を評価する上で、「詳細で微妙な」違いを理解することよりも、「肯定的か否定的か」、「敵対的か友好的か」、という違いを把握することの方が、適応的な日常生活を送る上で重要な側面なのかもしれない。

## 2) 本研究の課題

本研究を行う中で以下の点について課題と考えられた。

まず1点目に尺度による問題である。本研究で利用した尺度のうち、凝集性を測る尺度のみ、個人の感情や内面などの情報を聞くといったものでなく、被験者の家庭関係についての問いが中心となっている。凝集性尺度は、家族との結びつきの問題を主として確認するため、自分自身と向き合うというよりは家族と生活している中で家族との関係をどう感じるかを思い出すことが重要となる。逆に、対人不安尺度、社交性尺度、自己意識

尺度は、個人の内面状態が意識化されたものを点数化しているため、回答する際に自分自身と向き合い、ある程度の自己分析を行わなければならない。つまり、尺度によって回答する次元の違いがあり、またその回答への難易度も異なっていたため、評価する次元を均一化することが必要と考えられた。

2点目は写真の問題である。本研究で使用した8枚の写真は、協力者と会話をしながら撮影した。協力者にはどのような表情の写真を撮影するかは説明していたが、自然な表情を得るために、表情を事細かく指示しながらの撮影は行わなかった。利用する写真を3名の心理学科の学生、および教員による合議制で決定したものの、瞬時に判断するのは難しい写真も多かった。そのため、被験者も瞬時に判断することが難しく、そのことが原因で結果にあまり差が見られなかった可能性も否定できない。実際、被験者の回答の中には、異なる表情である2枚の写真が同じ表情に見えるといった回答もあった。写真の表情から感情を読み取ることは難しいが、もう少し誰が見てもはっきりと表情がわかる写真を用意すれば、研究結果が変わっていた可能性があるのではないだろうか。

3点目はWEB上での実験の問題である。本研究ではコロナウイルスの影響により、対面を避け、WEB上での実験を行った。WEB上での実験は、直接被験者と会うことはなく、見知らぬ人にも回答してもらえることができ、非常に情報を収集しやすい。しかし、被験者がどのような状況で実験を実施するのかという点は統制できないという点は、WEBにおける調査研究の課題と言えるのかもしれない。

### (注)

本研究で使用した顔写真については個人情報保護の観点から非公開とした。

## 文 献

藤原健 2015 その笑顔は偽物です—信号検出理論を用いた笑顔の判断バイアスの検討—日本心理学会大会発表論文集 79 (0), 1EV-024-

1EV-024.

- 福島祐人・橋本慶男 2014 大学生版「笑いの態度尺度」作成の試み 笑い学研究 21 (0), 75-82.
- 石井清一・今野義孝 1987 自閉症児の表情認知に関する研究 教育心理学研究 35 (4), 344-350.
- 伊藤理絵 2011 ヒトは「笑い」から何を思うのか:「笑い」のイメージに関する検討 笑い学研究 18 (0), 50-58.
- 北山淳 2008 特別支援教育における発達障害の理解:自閉症児の表情認識について 四條学園大学リハビリテーション学部紀要 4, 29-34.
- 毛新華・大坊郁夫 2006 大学生の社会的スキル尺度構成の試み 中国心理衛生雑誌 20, 679-683.
- 益子行弘・齊藤美穂・萱場奈津美 2011 表情の変化量と笑いの分類の検討 日本知能情報ファジィ学会 23 (2), 186-197.
- 益子行弘・齊藤美穂 2006 [修士論文要旨] 表情の変化が印象と笑顔の認知に与える影響 人間科学研究, 57.
- モンデリーズジャパン 2017 “いい歯”と笑いに関する意識調査 <https://jp.mondelezinternational.com/Newsroom/2017-Press-Releases/171106> (2020年7月取得)
- 西銘大喜・遠藤聡志・當間愛晃・山田孝治・赤嶺有平 2017 曇り込みニューラルネットワークを用いた表情表現の獲得と顔特徴量の分析 人工知能学会論文誌 32 (5), F-H34\_1-8.
- 岡林尚子・生和秀敏 1992 対人不安感尺度の信頼性と妥当性に関する一研究 広島大学総合科学部紀要. III, 情報行動科学研究 (15), 1-9.
- 大藪博記・吉川左紀子 2007 笑顔の強度と印象判断との関係 日本心理学会大会発表論文集 71 (0), 41.
- 菅原徹・笠井直子・佐渡山亜兵・上條正義・細谷聡・井口竹喜 2007 笑顔の多様性と印象の関係性分析 感性工学研究論文集 7 (2), 401-407.
- 菅原健介 1984 自意識尺度 (self-consciousness scale) 日本語版作成の試み 心理学研究 55 (3), 184-188.
- 佐藤慈・坪井麻早記・青木直和・小林裕幸 2011 顔画像による印象形成—画質効果の個人差について—日本写真学会誌 74 (6), 315-319.
- 佐藤嘉晃・日下部豊寿・飯田順一郎 2012 笑顔

## 視覚で判断できる笑顔の種類と個人特性との関係性

の認識について 北海道矯正歯科学会雑誌  
40 (1), 26.

佐々木正美 2010 発達障害への理解と対応 —  
思春期をより円滑に乗り越えるために— 脳  
と発達 42 (3), 179-183.

立山慶一 2006 家族機能測定尺度 (FACES III)  
邦訳版の信頼性・妥当性に関する一研究創価  
大学大学院紀要 28, 285-305.

## 付 記

本論文の作成にあたり、上松幸一准教授を始め、ご協力いただいた皆様に御礼申し上げます。

別表 本研究で利用した各尺度の質問項目

対人不安尺度	1	私はちょっとした集まりでさえも、しばしば引っ込み思案になる。
	2	私は知らない人の集まりの中にいると、いつも居心地が悪い。
	3	私は異性の友人に対して、いつも気楽に話せる。
	4	私は先生や上司と話をしなければならぬと、そのことが負担になる。
	5	私はパーティーなどで、しばしば不安になったり不快な気持ちになったりする。
	6	私はどちらかといえば、社交的な方だ。
	7	私は同性の人でも、あまり親しくない人と話すとき々緊張する。
	8	私がかし仕事で人と会わなければならないとしたら、そのことがかなり気がかりとなる。
	9	私は人と付き合っていく上で、もっと自信が持てるようになりたい。
	10	私は対人関係がそれほど苦にならない。
	11	一般的に私は内気な方だ。
	12	私は魅力的な異性に話す時、しばしば臆病になる。
	13	私はあまり親しくない人に電話をかける時、そのことが苦になる。
	14	私は偉い人に話しかける時、いつも緊張する。
	15	私は知らない人の中にも、たいていリラックスできる。
社交性尺度	1	人と一緒にいる時、共通の話題をすぐ見つけることができる。
	2	見知らぬ人とでも、すぐ仲良くなる。
	3	人見知りせず、どこでも飛び込んでいける。
	4	私は、周りの人の感情をどうすればうまくコントロールできるかを知っている。
	5	人に暖かく接する。
	6	自ら人と親しくなろうとしない。
	7	いろいろな人とつながりを持っている。
	8	自分から積極的に話しかける。
	9	人に頼りにされることがよくある。
	10	自分の前で人を笑わす自信がある。
	11	どうすれば周りの人たちをまとめることができるかわからない。
	12	誰とでも仲良く付き合うことができる。
自意識尺度	1	自分が他人にどう思われているのか気になる。
	2	世間体など気にならない。
	3	人に会う時、どんなふうふるまえば良いのか気になる。
	4	自分の発言を他人がどう受け取ったか気になる。
	5	人に見られていると、つかつかうをつけてしまう。
	6	自分の容姿を気にする方だ。
	7	自分についてのうわさに関心がある。
	8	人前で何かする時、自分のしぐさや姿が気になる。
	9	他人からの評価を考えながら行動する。
	10	初対面の人に、自分の印象を悪くしないように気づかう。
	11	人の目に映る自分の姿に心を配る。
凝集性尺度	1	私の家族では、困った時、お互いに助け合う。
	2	私の家族は、お互いの友人を大切にしている。
	3	私の家族は、みんなで一緒に何かをするのが好きである。
	4	他人同士よりも、家族同士の方が親しみを感じる。
	5	私の家では、自由な時間を家族と一緒に過ごす。
	6	家族の誰もが、お互いに強い結びつきを感じている。
	7	何かをする時は、家族みんなでやりたいことがすぐに思いつく。
	8	私の家では、何かを決める時、家族の誰かに相談する。
	9	私の家族はよくまとまっている。